樹木の王すぺしゃる！

リンクス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
樹木の王すぺしゃる！

【Ｎコード】
Ｎ０４０８Ｑ

【作者名】
リンクス

【あらすじ】
先日完結した樹木の王の番外や一発ネタを思いつき次第投稿していきます。息抜きにでもどうぞ。
基本ネタしかありませんので御注意を

一発ネタ？　ムラサメが聖杯に呼ばれたなら（前書き）

活動報告でも書きましたがムラサメが聖杯に呼ばれたらを書きましたので投稿します。連載するかどうかは反応次第というか、分かりませんが、今は一発ネタということで……。

一発ネタ？　ムラサメが聖杯に呼ばれたなら

深い、深い森の奥。

白い白い雪が積もる森の奥。

どこまでも白い、穢れのない雪が降り積もる森の奥。

森に隠されるかのようにひっそりと城が立っていた。

それは大きな城だった。

しかし、大きな城だというのに人の気配が余りしない。

温もりが感じられない。

そんな城の中の大広間。

そこに彼女はいた。

雪のように白い髪に、陶磁の様な白い肌。

少女の顔には汗が浮かんでいる。

そして少女は唄いだす。

「――告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。
　聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

少女の口から言葉が紡ぎだされる。
言葉が紡ぎだされると同時に、彼女の肌に何らかの刻印が浮かび上がる。
それは魔術陣のようだった。
それは赤く、紅く輝いている。
刻印の輝きに呼応するが如く、少女の前の魔法陣の輝きも強くなる。
「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。
されど汝はその眼を混沌に曇らせ侍るべし。汝、狂乱の檻に囚われし者。我はその鎖を手繰る者――。
汝三大の言霊を纏う七天、
抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――――！」
魔法陣の輝きが一層強くなり、光が部屋を包みこむ。
そして、光が消え、視界がクリアになる。
「なに、これ？」
少女が呟く。
少女がそう呟くのも無理はない。
自分は大英雄を召喚しようとしたはずだ。

だが、今目の前にあるのは大英雄などではなく、樹。
雄大で神々しい大樹。
「まさか、失敗？」
その時、大樹が動いた。
大樹はうねりながら、何かの形を成していく。
それは門のようにも見えるし、扉のようにも見える。
そして中から一つの人影が現れた。
それは左腕に長手袋をはめていた。
「サーヴァント、バーサーカー。聖杯とやらに呼ばれて来た。お前さんが俺のマスターとやらでいいのか？」
「え、えぇそうよ。私が貴方のマスターよ。よろしくバーサーカー」
「おぅ」
ここにどこまでも白い少女と自然の代行者の契約がなった。
目の前の男と自分が魔力のパスで繋がっている事から男がサーヴァントである事に間違いはない。
そして、頭の中に目の前のサーヴァントのステータスが浮かんで

くる。

「貴方、強いのね。クラスは確かにバーサーカーのようだけどヘラクレス、じゃないわよね？」

「そうだな、俺はヘラクレスではない」

「じゃあ貴方は誰？」

「俺の名前はムラサメ。ムラサメ・イツキだ」

ムラサメ・イツキ

名前からして日系だろうが、そんな英雄は聞いた事がない。

「ねぇムラサメ。貴方はどこの英雄？」

「……さぁ？　とりあえず歴史上の人物ではないな」

「つまりは異世界？　いや平行世界……」

少女は何かを考え始める

「おーい、取り敢えず名前を教えてくんねぇかマスター」

「あ、そうね。私はイリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルンよ」

「それでバーサーカー。貴方は何が出来るのかしら？」
「そうだなぁ。あ、農作業と料理、物造りは得意だぞ」
「え？　何？　もう一回言ってくれる？」
「農作業と料理、物造り」
イリヤは頭が痛くなるのを感じた。
「それ以外は？」
「後は魔法を少々と。こういった事だな」
ムラサメはそう言うとテーブルに手を置く。
そして、ムラサメが手を放すとそこには青いバラが咲いていた。

「バーサーカー！　今何をしたの！？」

「何って、こうだが？」

そう言い、ムラサメは再びテーブルに手をつき、今度は水晶の様に透き通るバラを咲かせた。

「生命の創造……。凄い！　バーサーカー貴方凄いわ！」

しかしバーサーカーの顔色は優れない。

「どうしたの？　バーサーカー」

「いや、前はこう言ったのは無制限に出来たんだが、今は疲労感を感じる」

「それは、多分貴方の知名度がないからね」

「知名度？」

「そう。貴方という存在を知っている人が多ければ多いほどその力は増すの。でも、私も含めて誰も貴方という英雄を知らない。だからある程度弱体化してるのよ」

「なるほど……」

「それにしてもバーサーカーは凄いわ。弱体化しているのにこの能力値。更には生命の創造まで可能だなんて。
もっと詳しく話を聞きたいわ」

「それはいいが、もう真夜中だぞ？」

「大丈夫よ。だって私はもう立派なレディーよ」

イリヤはそう言うが、何処か眠そうである。

そして、それを隠し胸を張る姿が金色の少女と重なる。

「明日でいいか？　なんか俺が疲れた」

「……サーヴァントなのに？」

「サーヴァントでもだ」

「むぅ、平気なのに」

「何を言っているんだ。俺が眠いんだ」

「そう言う事にしておくわ。じゃあ詳しくは明日にしましょう。お休み、バーサーカー」

「お休み、マスター」

一発ネタ？　ムラサメが聖杯に呼ばれたなら（後書き）

どうでしょうか？　どうも難しいですね。こんなクオリティで良かったらチマチマと連載していこうと思います。それでは、失礼します。

試運転で第二話！（前書き）

連載してほしいという声を多数いただきました。ありがたい事です。
とりあえずチマチマとやってみたいと思います。完結までいけるかは分かりません。

もう一回原作やっておいた方がいいかな……。

試運転で第二話！

イリヤが目を覚まし、辺りを探ると昨日自分が召喚したサーヴァントの姿が見えない。

霊体と化し、不可視になっているのかと思い、辺りを探るが、気配すらない。

「バーサーカー？」

名前を呼んでも返事は返って来ない。

「もう、マスターを放って何をしてるのかしら」

イリヤはベッドから立ち上がり、着替えながらバーサーカーに念話を送る。

『バーサーカー、聞こえる？』

『聞こえるぞマスター。何かあったか？』

『貴方の姿がないから何処にいるのか、と思ってね』

『城の外にいる』

『外？』

『あぁ、今良い所なんだ。用がないならば後にしてくれ』

バーサーカーはそう言うと念話を切る。

それ以降はいくら念話で語りかけても反応はなかった。

「マスターよりも大事な事？　なにをやってるのかしらね」

イリヤは少し不機嫌になりながら、城の外を眺める。

外は雪が深々と降っており、何かをするには適さない様に思う。

「しょうがないわね。見に行ってみましょう」

イリヤは防寒具を着こみ、城の外に出る。

「バーサーカー、どこにいるの！」

バーサーカーを呼ぶと、城の裏手から返事が返ってくる。

「城の裏？」

イリヤは積もったばかりの新雪を踏みながら、城の裏に回る。

そして、彼女の目に入ったのは

「なに、これ……」

昨日までは無かった広大な畑だった。

そして、畑の真ん中でそれはもう嬉しそうに満面の笑顔でクワを振るっている男がいた。

それは自分が召喚したサーヴァント『バーサーカー』だった。
イリヤは目の前の光景によろけたが、倒れない様になんとか踏ん張る。
「お、マスター。おはよう」
「バーサーカー、何をしてるのかしら？」
「何を？　見て分からんか？　畑仕事だ」
「それは分かるわ。私が聞きたいのは何で城の裏にいきなり畑が出来てるのかということよ」
「そんなもん決まってるだろう。俺が耕した」
バーサーカーは胸を張り、堂々と言った。
「どうやってこんなに広い畑を……」
「それはこれだ！　俺が持つ宝具の一つ『アースプランナー』の力だ！」
バーサーカーは先程まで振るっていたクワを掲げる。
「え、それ宝具なの？　そんなのが貴方の宝具なの？　嘘よね？　嘘って言って！」
「嘘は言わん！　これは正真正銘俺の宝具だ！」

イリヤは今度こそ膝から崩れ落ち、落ち込んだ。

「昨日は大当たりかと思ったのに……。まさか宝具が農具だなんて……」

バーサーカーはイリヤの傍に来ると、肩に手を置いた。

「まぁ、良い事あるさ」

「私を落ち込ませた張本人に慰められた！」

「ＨＡＨＡＨＡＨＡ！」

「今ほど令呪を無駄遣いしたいと思ったことはないわ……」

イリヤはグギギという音がしそうな程、歯ぎしりをする。

「安心しろマスター。これは宝具の一つだ。他にも宝具はある」

「ホント？　今度は農具じゃないのよね？」

「あぁ、農具じゃないさ。だから安心しろ」

バーサーカーが良い笑顔をする。それはもう清々しい程に。

イリヤは顔を上げ、バーサーカーの顔を見つめる。

「立て、マスター。雪が積もるぞ」

バーサーカーは手を差し出し、イリヤを立ち上がらせる。

「ありがとう、バーサーカー。って違う！　バーサーカー、貴方この畑どうするつもり？」

「どうって、作物を植えて育てるが？」

「聖杯戦争はどうするのよ」

「俺に畑を置いて行けというのか！？」

「貴方はサーヴァントでしょ！！　農夫ではなく戦う者でしょう！」

「……それは、そうだが。折角ここまで畑を大きくしたのに」

「バーサーカー、聖杯戦争が行われる日本にある別荘も森だからそっちで畑を作りなさい」

ここで農作業を禁じない辺り、イリヤの優しさが分かる。

「マスター……。あぁ、分かった。一緒に畑仕事を頑張ろう！」

「これっぽちも分かってやがらねぇ！　このサーヴァント！」

その後、外の喧騒に気づいたセラとリズが来るまで、雪が降り積もる森の中に少女と男の声が木霊した。

「それで、バーサーカー。貴方は昨日、魔術ではなく魔法が使えるとか言ってたわね？」

セラとリズによって屋敷に戻ったイリヤはバーサーカーについて聞いていた。

「おぉ言ったぞ。まぁ聖杯に与えられた知識から言うなら俺が使うのは魔術と言っても大差ねぇけどな」

「そう、どんな物か見てみたいけどそれは戦争の時に見せて貰うわ。それよりも貴方の事を教えて」

「俺の？」

「そう、私は貴方という存在が何なのか知らない。だから私は知りたいの」

イリヤを含め、この世界に生きる人間は目の前の男の事を知らない。

知らないと言う事は知名度が無いと言う事だ。

サーヴァントは知名度に応じてその力を増す。

その為イリヤは大英雄ヘラクレスを召喚しようとしたのだが、出てきたのは目の前の男。

彼女一人が彼の事を知った所で彼の力が増す訳ではないだろうが、

知りたいと思った。
「まぁいいけどよ。俺は向こうでも畑仕事とか自由気ままにやってた。……後は『自然の代行者』をやってた」
「自然の代行者？　何それ？」
「ここでマスターに問題だ。自然に意思は、感情はあるでしょうか？」
急な問いにイリヤは面食らうが、なんとか答えを言う事が出来た。
「無い？」
「ブブー。外れ。自然にも意思が感情がある。だが、こいつ等はそれを言う事が出来ない。
俺はそういった声無き自然の代行者なのさ。
無意味に破壊される自ら戦えない自然の代わりに戦う存在、それが俺だ」
「自然の代わりに戦う。聞き様によっては随分と傲慢に聞こえるわね。
貴方はどうやって自然の声無き声を聞くのかしら？」
「それを口で説明するのは難しいな。強いて言うなら自然にはネットワークというのが存在する。
この世に存在する自然全てがそれに繋がっている。言うなれば一は全、全は一という奴だ。
俺はそのネットワークに接続出来るから、声を聞く事が出来るんだ」

彼は頭をかきながらそう言うが、イリヤにはいまいち理解が出来ない。

「よく分からないわ。ネットワークとかいう存在の事は取りあえず納得するとして、どうして貴方がそれを聞く事が出来るのかが分からないわ」

「あ〜、俺も何て言えばいいのか分からん。取り敢えずそう言うもんだ」

「説明を諦めたわ、このサーヴァント！」

「もういいじゃん。そういう物って事で」

「説明義務を果たしてよ！」

「……もう見せた方が早い気がしてきた。驚くなよ？」

彼はそう言うと左腕につけていた長手袋を外す。

そこには人間の腕ではなく、樹で構成された腕があった。

「わ……。なにそれ」

「見ての通り樹の腕だ。俺は半人半樹の存在なのさ。だから声を聞ける」

半人半樹、どうやら目の前の男は人間と言っていいか分からない存在だった。

「どうしてそんな腕なの？」

しかし、イリヤはそこまで反応することは無かった。

この時点でこの少女もどこかずれているのだろう。

「どうしてこうなった、か。それは俺の心臓にある奴のせいだな」

彼が胸をトンと叩く。

それと同時にイリヤの脳内に情報が送られてくる。

それは宝具として見るならば規格外の一言だった。

名称：大地の種
クラス：ＥＸ
種別：創造宝具
レンジ：無し
最大補足：一人

植物を創造する事が出来、植物という枠ならば空想の産物でも創造可能。ただし、創造する物によって消費する魔力が変化する。また、所有者は大地の種を完全に一撃で完全破壊されない限り再生を遂げる。

「凄い凄い！　こんな宝具があるなんて！。こんなの誰が勝てるのかしら？」

「まぁ、一撃で破壊されたらそれで終わりなんだけどな」

「それでも凄いわ！」

イリヤは満面の笑顔を浮かべ、笑う。

このサーヴァントならば戦争に勝てる。

そう思うだけで笑い声が漏れてしまう。

「貴方は大当たりね、バーサーカー。あぁ聖杯戦争が楽しみだわ」

少女は屈託なく戦争が楽しみだと笑った。

そんな彼女にバーサーカーが言った言葉は唯一つ

「畑に行ってもいいか？」

試運転で第二話！（後書き）

こんなクオリティで本当に大丈夫か……？

こいつ、動くぞ。第三話（前書き）

はい、そんなこんなでまさかの第三話目です。こんなクオリティーでいいというありがたいお言葉をいただいたので投稿します。今回は後書きの所にステータスでも載せておきます。

こいつ、動くぞ。第三話

バーサーカーを召喚してからというものイリヤの日課にある事が加わった。

「バーサーカー！　何処にいるの？」

それは、バーサーカーを探す事だった。

あのサーヴァントはマスターである彼女の下にいることが稀であり、

基本城の裏にある畑にいる。

貴方はマスターと畑どちらが大事なのか、と聞いてみた時、彼は三十秒程悩んでからマスターと答えた。この答えに喜んでいいのか、怒るべきなのか、少女の悩みは尽きない。

そして、今日もまたバーサーカーを探しているのだが、今回は勝手が違った。

いつもいる畑にも居らず、城の中にもいないのだ。

「もう、何処にいったのかしら」

イリヤは頬を膨らませながら、バーサーカーに宛がった部屋に入る。

当然、部屋の中に人影は無かった。

イリヤは部屋から出て行こうとしたが、その時机の上にある物を見付けた。

それは直径３０?程のガラス球のようだった。

中には森のような物が映っている。

「なにかしらコレ。バーサーカーの？　うーん」

取り敢えずガラス球を調べようと近づいた時、足元に魔法陣が現れる。

「え、何？　ちょっと！」

イリヤは魔法陣の中に消えていった。

「んもぅ。なんだったのよ」

イリヤが目を開くと、目の前は森、森、森。見渡す限りの森。

遠くの方には見た事のない程の巨大な樹が生えている。

「どこよ此処ーーーーーーー！！」

もう、いっぱいいっぱいな叫びが森に木霊する。

森からは何かの唸り声や光る目が見える。

イリヤは本能的に一歩下がる。

獣は森から出てくる事はないようで、こちらをジッと見つめている。

イリヤの目に涙が溜まり始める。

「どこなのよ、ここ……。バーサーカァ、何処ぉ……」

「呼んだか、マスター」

返事が返ってくるとは思わなかったのか、イリヤはバッと振り返ると、そこにはいつもと変わらないバーサーカーがいた。

「バーサーカー！　ここは何処なの！？　アレは何なの！？　取り敢えずマスターは放っておかないでよ！　喰われたらどうするのよ！！」

イリヤからマシンガンの如く疑問と文句をぶつけられ、バーサーカーは取りあえず謝ろうと決めた。

「すまん、すまん。まさかマスターが此処に入ってくるとは。いや、予想外。まぁ、疑問には一つずつ答えよう。
ここは俺の部屋にあったガラス球の中。そして、この大樹海こそ俺の持つ宝具『人ナラヌ者達ノ楽園』通称別荘だ」

「？　ガラス球の中？　何を言ってるの？　私は此処にいるわよ。そして背が小さくなった訳でもない」

「なんというか説明が難しいんだが、噛み砕いて説明すると此処は

一種の別世界だ！　箱庭だ！
それ以外は説明出来ん！　俺も貰っただけだからな！」
「開き直らないでちょうだい。別世界？　箱庭？　取り敢えず魔法の領域よね……」
「後、ここの中では一日は現実の一時間だ」
「時間の制御まで！？　もう、訳がわからないわ……」
「人生そんなものだ、マスター」
「くっ、このサーヴァントが説明義務さえ果たせば何も問題は無いというのに……ッ」
イリヤは地団駄を踏むが、バーサーカーは何処吹く風といった様子で相手にしない。
それどころか森の方に歩いていくではないか。
「ちょっ、待ってよ。バーサーカー！」
「え、マスターついてくんの？」
「なによ、その迷惑そうな顔。ここは貴方の宝具なんでしょう？
貴方が支配者なんでしょ？
だったら問題ないんじゃない？」
「説明が足りなかったな。ここは確かに俺の宝具の中だ。だが、
ここに生きる生物は俺の支配下に置かれていない。野生そのものだ」

バーサーカーの説明にイリヤはバーサーカーの服の裾を掴む。
先程から獣の光る目が彼女を見つめているからだ。
「それでも貴方がいれば大丈夫よね？　守ってくれるんでしょ？」
「それは、そうだが……。今回は目的があって来てるしなぁ。よし、決めた。
マスターは少し待っててくれ。用事は急いで済ませてくる」
「おいてくの！？　私をこんな危険な所に置いて行かないでよ！」
「大丈夫だって。護衛はおいて行くから。ストルズ！！」
バーサーカーが何かを呼ぶと、森の奥から何かが駆けてきた。
それは立派な体躯を持つ白い狼だった。
体長は６ｍ程だろうか。
「狼？　大きくない？」
「こいつはストルズ。こいつと一緒にいれば大体の野生は襲ってこない。じゃ、そういうことで！」
バーサーカーは手をシュタッとあげると、軽い足取りで森の奥に消えていった。
「あ、バーサーカー！」

イリヤは追いかけようとするがストルズと呼ばれた狼に襟部分を咥えられ追いかけることはできなかった。

ストルズはイリヤの襟を咥えたまま森の入口に戻っていく。

「私、猫じゃないんだけど……」

イリヤのそんな呟きが聞こえたのか、ストルズはイリヤを自らの背中に乗せた。

「……貴方の毛すごく気持ちいいのね……」

イリヤは柔らかな毛皮とユラユラと揺れる動きで段々と眠くなり、いつしか眠りに落ちていた。

「……きろ。起きろ、マスター」

ペシペシと頬を叩かれ、イリヤは眠りから覚めた。

「バーサーカー？」

「おぅ」

イリヤが目を開け、前を見ると何かを抱えたバーサーカーが目の前にいた。

「よく寝てたみたいだな」

「……そうみたいね。ありがとうストルズ」

「グルゥ……」

イリヤが礼を言うと、ストルズはそれに応えるかのように尻尾を一振りした。

「さて、マスター。帰るぞ」

「帰るって用事は？」

「終わったさ。さぁお楽しみの時間だ」

バーサーカーはそう言い抱えていた大きな果実を掲げた。

気づけば、その果実からはとても豊潤な香りがしており、イリヤは自分の喉がなるのを感じた。

別荘から出ると、バーサーカーは果実を抱え調理場へと消えていった。

その時にイリヤにこう言った。

『マスター、天国を見せてやろう』、と。

正直言って、怖かったがそれでも興味の方が勝っていた。

あのサーヴァントは今度はどう自分を驚かせてくれるのだろうか、と。

しばらく待つと、バーサーカーが手に料理を入れた皿を持ってきた。

「虹の実ゼリーだ。これは、美味いぞ」

そういい、バーサーカーが皿の蓋を取る。

すると、虹色に輝くゼリーがその姿を現す。

ゼリーの上には蒸発した果汁により、虹がかかる。

「わぁ、綺麗……。でも、これ食べられるの？」

「俺が信じられないのか、マスター。この従順なサーヴァントの言葉が」

「うん、色々と突っ込みたいわ。でも我慢よ、私。じゃあいただきます」

イリヤはゼリーを恐る恐る口に運び入れた。

口に入った瞬間にゼリーの味が変化する。

完熟マンゴーを数百個を凝縮したかのような糖度かと思えばレモンやキウイとは比べ物にならない程の酸味。

すでに口の中で味は四回変化した。

そして、飲みこもうとする時には甘栗のような香ばしさが顔を出し、飲みこんだ後にさえ、圧倒的な存在感が顔を出す。

味が変化した回数は実に七回。

イリヤの口から溜息が洩れる。

「……おいしい。バーサーカー、これ凄い美味しいわ！」

バーサーカーはイリヤのそんな感想を嬉しそうに眺める。

「それは何よりだ。虹の実ゼリーは温度で味は更に変化する。少しおいておいたらどうだ？
聞きたいこともあるだろう？」

イリヤはバーサーカーの勧めに従うことにし、一度スプーンを置いた。

「そうね。それじゃあ聞くわ、バーサーカー。私はこんな実を知らないし、ストルズみたいな生き物も知らない。あれは何処の生物なの？」

「あいつらは俺の別荘、宝具の中にしか存在しない。俺と言う存在が座に行く前、要するに生きてる時だな。その時に家族から貰ったアレに適当に動植物を入れてたら独自の進化を遂げたんだ」

「家族から貰った……。貴方の家族って何者かしら？　というか貴方の世界っておかしいのね。
こんな技術がゴロゴロあるんだから」

「お？　俺と言う存在を平行世界の存在にしたか」

「当然よ。じゃなきゃ信じられない事が多すぎるもの。それにしても貴方って無茶苦茶ね。
そんなので家族以外に友達はいなかったんじゃない？」

「失礼な、いたぞ。アーちゃんとかな」

「アーちゃん？」

「おう、アスモデウスだ」

アスモデウス、その名を聞いた瞬間にイリヤは椅子から転げ落ちた。

「アスモデウスゥ！？　それって七大魔王の？」

「そう、それ。後はルシファーに、リリス、バアルゼブルとかだな」

ポンポンと出てくる魔王の名にイリヤの顔色がどんどん白くなっていく。

「このサーヴァント、当たりだとは思っていたけど最早当たりを通り越して鬼札のような気がしてきたわ」

「ん？　地獄ってのは一つなのか？　なら呼べばあいつ等は来れるのかな？」

「呼んじゃ駄目！！」

アスモデウス等を呼ぼうとしたバーサーカーを止めるのに彼女の思考は中断された。

この時、床に悪魔の手らしき物が見えたのは気のせいだろう、そう信じたい。

なんとかバーサーカーを止めたイリヤは虹の実ゼリーを食した後、バーサーカーに言った。

「色々と突っ込みたいけど、取り敢えずゼリーは美味しかったわ。これ以外にもあるの？」

「色々あるぞ。まぁ今度食べればいいさ」

お茶を飲みながら会話を続ける二人。

イリヤはティーカップをテーブルに静かに床に置き、言った。

「バーサーカー、そろそろ行きましょう」

「戦い、か？」

「えぇ、そろそろ戦争が始まるわ。ならば私達も舞台に上がるべく準備をするべきだわ」

「勝てるか？」

「勝つのよ。自信がない？」

「まさか」

「ならいいわ。じゃあ行きましょうか、日本の冬木市へ。私達の舞台へ」

イリヤは可憐に頬笑み、バーサーカーはそのクラスに相応しい獰猛な笑みを浮かべた。

こいつ、動くぞ。第三話（後書き）

ははは、酷い出来だ。ｆａｔｅで書くって難しいわ。いや、頑張りますけどね。
そんなこんなでそろそろ聖杯戦争が始まります。要するにカオスの時間です。

ステータス
クラス　バーサーカー
真名　ムラサメ　イツキ
性別　男性
身長　１８３？～？？？
体重　８０？～？？？
属性　中庸・中立
能力　筋力：Ａ＋　魔力：Ｃ
　　耐久：Ａ　幸運：Ｂ
　　敏捷：Ｄ　宝具：ＥＸ
単独保有スキル
物造り：Ａ＋
料理や工作などの物を作る事に異様に秀でる。
再生：ＥＸ
宝具により一撃で完全に破壊されない限り再生する。
農耕：ＥＸ
これでもかというほど大地に愛されているため、農作は必ず上手くいく。
？？？：？
まだ秘密。まぁ本編読めば何かはわかる。発動すれば止められる者はいない？

保有スキル
乗馬：Ｅ
乗れない。というか走る方が速い。
単独行動：Ａ＋
マスター？　なにそれ美味しいの？　というくらい単独で行動可能。
狂化：測定不能
戦闘意欲をかきたて、能力を向上させるも若干理性と冷静さを失うもの。

ステータスってこんな感じだったけ？　やったの昔だからあまり覚えてないんですよね。……それにしても酷いサーヴァントだ。

番外。竜華零様とのコラボです。（前書き）

まさかのコラボです。お相手は竜華零様の作品、『魔法先生ネギま～とある妹の転生物語～』のアリアさんです。では、お楽しみください。

番外。竜華零様とのコラボです。

空には雲一つ無く、太陽の光が燦燦と降り注ぎ、大地に恵みを与える。

そんな晴天の下、ムラサメは鼻歌混じりに畑を耕していた。

手に持つクワはエヴァンジェリンとの仮契約で手に入れたアーティファクト『アースプランナー』。

正直言って、アーティファクトで真面目に戦っている人全員に謝れと言いたくなるアーティファクトである。

ムラサメがそんな事を気にするはずも無く、畑を耕し続ける。

一度、空を見上げ、クワを振るおうとした時だった。

「……ここは何処でしょう？　って、体が埋まって何も出来ませんね。どうしたものでしょう」

彼の足下から声が聞こえた。

ムラサメが視線を落とすと、今まさに彼が耕そうとしていた場所に１０才ほどの女の子が、

上半身のみを地面から出し、現れていた。女の子は思考に没頭しているのかムラサメに気づいていないようである。

「畑から少女が生えてきた……っ」

「え？」

ムラサメの言葉で少女も思考を一時止め、上を見上げる。

そこにはクワを振り上げた強面の男。

そして少女は地面に埋まっており、何も出来ない状態。

傍から見れば公開処刑か何かと勘違いするような光景である。

「こ、殺されるーーーー！　あぁ！　体が埋まってるから魔法具が使えません！
誰か、助けて下さい！」

少女の悲鳴が畑に木霊する。

すると、叫びを聞きつけたのかエヴァンジェリンが文字通り飛んできた。

「ムラサメっ！　何事……だ……」

エヴァンジェリンの目に入った光景は畑に埋まってる少女。

少女の頭にクワを振り下ろそうとしているムラサメ。

そして、殺されると叫ぶ声。

「早まるなーーー！　落ち着け、ムラサメ！！」

エヴァンジェリンはムラサメの腕にしがみつく。

少女の方はエヴァンジェリンの姿を見て、何処か納得したかのような顔をしていた。

しばらくエヴァンジェリンによるムラサメの説得劇が続くかと思ったが、

「えぇい、俺は何もしていない！　無罪だ！　ただ畑を耕そうとしていたら少女が
生えてきただけなんだ！」

「……なに？　どういう事だ」

「俺が知るか。話はコレに聞けばいいだろう」

ムラサメはそう言って埋まっている女の子を指差す。

「それもそうだな。おい、貴様何者だ」

「えぇと、全部答えますから取り敢えず土から出して貰えます？」

少女を地面から引っこ抜いたムラサメ達は彼の家で説明を受ける事となった。

「俺は、ムラサメだ。適当によろしく」
「私はエヴァンジェリンだ。まぁよろしく？」
「エヴァンジェリンの従者茶々丸です」
「チャチャゼロダゼ」
「私はアリア、アリア・スプリングフィールドです」
少女、改めアリアは優雅に礼をしながら自身の名を告げた。
スプリングフィールド、その単語にムラサメとエヴァンジェリンは顔を見合わせる。
「スプリングフィールドォ？　エヴァ、あいつの子供って一人だよな？」
「その筈だが……。隠し子か？」
「それも含めて説明します。まず私はこの世界の人間ではありません。
似て非なる世界、所謂平行世界の人間です」
平行世界。
この単語にエヴァンジェリンは目を見開く。
「平行世界だと？　証拠はあるのか？」

「証拠ですか。これでどうですか？」

アリアは懐から一枚のカードを取り出す。

それは仮契約のカードであり、契約者はエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルとあった。

「エヴァ、お前契約した？」

「する訳ないだろう。だが、確かに私の名前だ。こいつが平行世界の住人であるという証拠にはなるのか？」

「ふーん、まぁどうでもいいや。アリアだっけ？　どうやって世界を渡った？」

「それは私の持つ魔道具で。まぁ事故のような物でこちらに来てしまったんですが」

「なるほど、なるほど。それは直ぐ使えるのか？」

「いえ、一度使うとしばらくは……」

アリアの言葉にムラサメは心底面倒臭そうな表情を浮かべる。

しかし、何かを思いついたのかその表情は悪戯を思いついたような顔に変わる。

エヴァンジェリンは長い付き合いなのでまた碌でも無い事を思いついたのか、と嘆息している。

その時、クキュ〜〜〜、という可愛らしいお腹の音が部屋に響いた。

「エヴァ？」

「マスター？」

「御主人？」

「私ではない！　というか何故全員が私だと思うのだ！」

『だって、ねぇ？』

「よし、貴様らそこに正座」

ムラサメ達がエヴァンジェリンの方を見るが、エヴァンジェリンは否定し説教を始めようとした。

すると、アリアが顔を赤くしながら手をオズオズと上げた。

「すいません。私です」

「お前さん、腹減ったのか？」

「すいません。こっちに来る前が丁度お昼前だったので……」

「そうか、ならまずは飯にするか」

ムラサメはそう言うと、席から立ち上がり奥に引っ込んでいく。

「いいんですか？」

「遠慮するな。それに俺も飯はまだだったんだ。楽しみにしていろ、極楽を見せてやる」

アリアはその様子に些か不安を覚えたようだが、

「安心しろ。あいつはこういう時は巫山戯ない。本当に美味しい物を用意するさ」

とエヴァンジェリンに言われた。

料理が完成するまでの間、両者の間に沈黙が続く中アリアが口を開いた。

「エヴァンジェリンさんはムラサメさんとどういった関係なんですか？」

「あいつとの関係？　大切な家族で愛しい男だよ」

そう笑うエヴァンジェリンの姿は自分の記憶にある彼女と同じだった。

その笑顔は自分の知る彼女が自分に向ける笑顔と同じだった。

しかし、真正面から愛しい男という単語を聞いて、こういった所は違うのだなと思いながら、

アリアは顔を赤らめる。

「あ、もう一つ聞いてもいいですか？」

「うん？　なんだ」

「ムラサメさんって何者ですか？」

その質問にエヴァンジェリンの眉がひそめられる。

「それを聞いてどうする？」

「いえ、ただ知りたいなと思っただけです」

「そう、か。まぁお前は平行世界の存在だ。知ってあいつをどうこうするつもりもないか」

そう言いながらエヴァンジェリンはどうこうできる存在でもないしな、と付け加えた。

「それは、どういう事でしょう？」

「知りたければあいつに直に聞け。私から言えるのはあいつは私の家族ということだけだ」

エヴァンジェリンはそれ以上は言うつもりはないのか、黙ってしまう。

「待たせたな。本日の一品は完美牛のステーキと美肌キャビア添えサラダだ」

聞いたことのない食材にアリアは首を傾げる。

そんな彼女の様子にエヴァンジェリンが助け舟をだした。
「食材の事は気にするな。これらはコイツの別荘でしか獲れない物だ」
「そうなんですか。というか名前からして肌とかに良いんですか？」
「正解。今回の食材は全て美容に凄く良い。さぁ食べるといい」
ムラサメの言った美容に良い、という言葉にアリアも興味を持ったのか
恐る恐るステーキを口に運ぶ。
完美牛の肉は口に入った瞬間に肉本来の味と脂が顔を出す。
しかし、脂は直ぐに溶けてしまい、不快感を残さない。
「美味しい……」
気づけばアリアはムラサメの料理に夢中になっていた。
料理は直ぐに食べ終わってしまった。
「あっと言う間に食べてしまいました。本当に美味しかったです。ご馳走様でした」
「おいおい、ご馳走様にはまだ早いぞ。デザートがまだある」
ムラサメがそう言って出したのは苺の山だった。

「それは、苺ですか？」

「キューティクルベリーって言うんだが、効能は……説明が面倒だから食って確かめろ」

「では、いただきます」

アリアは苺を口に運ぶ。

苺は確かに美味しいが、味は苺そのものであり特別な何かがあるようには思えない。

すると、茶々丸が鏡を取り出し、アリアの顔を移す。

そこには先程とは段違いに艶やかに光り輝くような髪があった。

「髪が……。これがキューティクルベリーの効能」

「すごいだろう？」

「はい、これは凄いです」

その後しばらくの間、アリアは苺を食べながら歓談を続けていた。

食事を終えた後、アリアはムラサメに話しかけていた。

「ムラサメさん、貴方は何者ですか？」

「何者ねぇ。見ての通りの好青年？」

「いえ、そういう事を聞きたいのではなく」

「俺が何者であるか、それはどうでもいい事だろう？　俺はお前がどういう奴か詳しく知るつもりはない。だから、お前も詳しく俺を知る必要はない。お前はしばらくの間俺の客、それでいいじゃねぇか」

ムラサメはそれだけ言うと、黙ってしまう。

喋るつもりはない、と判断しアリアも諦めようとした時だった。

「その疑問にお答えしましょう！　何故なにムラサメ！」

床から山羊を模したようなおかしな気ぐるみが登場した。

「何故なにムラサメ？」

「くっ、それをやられたら答えざるを得ないか！」

ムラサメはそう答えると、何処からともなく白衣を纏った。

アリアは状況についていけずに首を傾げるばかりである。

「さて、ムーちゃん。目の前にいるアリアお姉さんからの質問だ。質問内容はズバリ、ムーちゃんが何者なのか！　ちなみに虚偽申告は許されない。
そして俺はアーちゃんことアスモデウスだ。一つよろしく」

アスモデウス、その単語に反応するアリアだが、彼らはそれを無視し、よくわからない催しを続ける。

「ふ、アーちゃん。このコーナーが開かれた以上説明をしない訳がないだろう。
ズバリ、俺は自然の代行者である！　自然の代行者についての説明はだるいので映像をドン！」

ムラサメがそういうと後ろに控えていた茶々丸がプロジェクターを起動し、動画を再生する。

それはムラサメが代行者として戦っているときの映像だった。

ムラサメが巨大な樹の生物、樹獣と共に戦う姿。

「これは……」

「ムーちゃんは、声なき自然に代わり戦う代行者だ。そして、彼は半人半樹の存在だ！」

アスモデウスの暴露と同時に彼の後ろで爆発が起きる。

これも後方で茶々丸が頑張っていた。

「半人半樹……。そうだったんですか」

アリアは得心がいったのか、頷いていた。

「あの、ついでにもう一つ聞いてもいいですか？　お二人の関係は？」

「「悪友兼心友」」

二人揃って同じ単語を口にする辺り本当に仲が良いのだろう。

「後、ムラサメさんの心臓部にある物は一体なんですか？」

アリアが質問をしたのだが、いつまで経っても答えが返ってこない。

どうしたのか、と思っていると、アスモデウスとムラサメは二人揃って衣装を脱ぎ、言った。

「「飽きた」」

「えぇ！　説明してください！　気になるじゃないですか！」

アリアは抗議の声をあげるが、二人は既にどこからか取り出した酒を取り出し呑み始めていた。

「アリア、諦めろ。こいつらはこうなんだ」

エヴァンジェリンがアリアの肩をポン、と叩いた。

その後もアリアと何故かエヴァンジェリンはムラサメとアスモデウスのコンビに振り回される事になるのだが、それはまた別のお話。

そして、アリアがムラサメの所に滞在し始めてから幾日か経ったある日。

「ムラサメさん、そろそろ帰ろうと思います」

「ん、使えるようになったのか？」

「はい。お世話になりました。色々と、それはもう色々と忘れません」

そう言うアリアの顔に疲れが見えるのは気のせいだろうか。

エヴァンジェリンなどはその様子に同情していた。

しかし、それは精神面に限っての事のみであり、体の方はムラサメの料理により、

今まで以上に、肌はツルツルに、髪はツヤツヤになっていた。

「まぁ、向こうでも達者でやれよ」

「はい、それでは失礼します」

アリアが魔法具を起動しようとした時、彼女の手元に二つの麻袋が投げ渡される。

「餞別だ。一つはキューティクルベリーの種と、魔力を回復させるハーブの種だ。
もう一つは寄生植物と邪悪な豆の樹の種だ。使いたい時に使えばいいさ」

「……ありがとうございます。寄生植物とか恐ろしい単語が聞こえた気がしないでもないですけど
頂戴します」

「おぅ」

「ムラサメさん、また話せますか？」

「さぁ？　適当にやってみれば会えるんじゃないか？」

「そう、ですね。それではありがとうございました」

最後にアリアは笑顔を浮かべ、消えた。

「いったな……」

「そうだな」

「寂しいか？」

「別に。ただ、少しばかり退屈になるだけだ」

「そう、か。また会えるのだろう？」

「さぁ？　存外また畑から生えてくるんじゃないか？」

番外。竜華零様とのコラボです。（後書き）

こんな感じでどうでしょう？　やはり他の方のキャラクターは動かし方が自分のキャラクター以上に動かせませんね。当然ですが。

竜華零様、何か問題があればご指摘願います。直ぐに修正いたします。

それではまた次回。

動いてみせろ！　第四話（前書き）

そんなこんなで第四話です。どんどんカオスになるなぁ。
どこかで一度見直した方がいいのだろうか。

動いてみせろ！　第四話

「バーサーカー、はしゃがないで。恥ずかしいわ」

「そんな事を言われてもな。俺、飛行機って初めて乗ったし」

「え、嘘」

「ホント」

過去の英霊でもなく、技術力はこちらと変わらない筈の平行世界出身である英霊が
飛行機に乗った事がない、というカミングアウトにイリヤは驚き、

「それじゃあ、どうやって移動してたの？」

「それは能力で創りだしたテレポート能力を持った花で」

バーサーカーからの答えにイリヤがプルプルと震え、爆発する。

何故、このサーヴァントはいつもいつもこうなのだろうか、と。

「そんな便利な代物があるならわざわざお金を払って乗る必要なかったじゃない！」

「だって、聞かれなかったし」

「そこは親愛なるマスターの為に自分から言い出す物でしょ！」

「親愛、なる？」

「そこで首を捻らないでよ！　この畑馬鹿！」

「ＨＡＨＡＨＡ！　最高の褒め言葉だ」

イリヤの叫びもぬかに釘、馬の耳に念仏。

本当にこのサーヴァントどうしてくれようか。

出来ることなら、今ここで滅却したい。いやいや、目の前のコレは仮にも英霊だ。

くっ、もっと自分に力があれば……。

そんな彼女の心情を知らず、涼しい顔でそれら全てを聞き流す己のサーヴァントに

イリヤは歯ぎしりをし、天を仰ぐ。

「神様、どうかこの阿呆サーヴァントが私を敬うようになりますように」

祈る姿は敬虔な信者を思わせる。

「あれ、マスター宗教やってたっけ？」

バーサーカーの問いに、

「ううん。無宗教」

色々と台なしだった。

「いいのよ、取り敢えず祈っとけば」

なんだかんだで仲の良い主従であった。

どちらが主導権を握っているかは別として……。

アインツベルンの別荘にたどり着いたイリヤ一行がまず行った事は、

魔術に関連する事ではなく屋敷の掃除だった。

「もー！　なんでこんなに汚いのよ！」

現在のイリヤの格好は三角巾、エプロン、箒という掃除における正装。

小学生に見える、というのは言いたくても言ってはならないタブーである。

「仕方ないです。もう何年も放置されてましたから」

「イリヤ、頑張ろ」

付き人であるセラとリズに宥められ、イリヤは叫ぶのをやめ、イリヤは大広間にある階段に腰をかけ、疑問に思っていた事を聞いた。

「……バーサーカーは？」

「彼なら外です」

「農作王に俺はなる！　って叫んでた」

「くっ、本当に私はマスターなのかしら？　セラ、リズ、どう思う？」

イリヤは光が消えた瞳でセラとリズに尋ねるが、彼女たちはサッと目を逸らす。

「うぅ、こんなんで聖杯戦争に参加してもいいのかな？　バーサーカーが悪い。
全部、全部、バーサーカーが悪い」

イリヤはヨヨヨと、階段に横になり泣き始めた。

セラとリズはなんとか慰めようとアタフタしている所に間が良いのか、悪いのか
バーサーカーが帰ってきた。

「マスター、なに泣いてんだ？」

「誰のせいだと思ってるのよ」

「とんと見当がつかない」
「そう、ならば言うわ。貴方のせいよ！　もっとマスターを大事にしてよ！」
「……大事にしてるつもりなんだけどなぁ」
「あぁ！？　どの口がそんな事を言うの！？」
「イリヤがグレた……」
「お嬢様！　戻ってください！　バーサーカー、謝りなさい！　誠意を込めて謝り、
お嬢様を更生させるのです！」
「何で俺が」
「な　に　か　文　句　で　も？」
セラの体から黒いオーラが溢れ、目が心なし輝いて見える。
バーサーカーは自身の背中から冷や汗が流れるのを感じ、本能が警鐘を鳴らしている。
すなわち、逆らうな。
「マスター」
「何よ」

「その、すいませんでした。もうちょっと真面目に頑張りますので、どうか元に戻ってはいただけないでしょうか」

本来なら敬語を使う事のないバーサーカーが敬語を使い、謝る。

生前の彼を知る者ならば、嘘だと思うだろう。

しかし、現在彼は敬語を使っている。

それもこれも後ろで殺意の波〇に目覚めたメイドが仁王立ちをしているからというのが大きい。

「本当に、真面目になる？」

「……少しは」

「少し？」

「誠心誠意頑張ります」

バーサーカーの言葉に満足したのか、イリヤの瞳に光が戻り、いつもの彼女に戻った。

その様子を見て、拍手をするメイド二人と拍手に答えるイリヤ、それを呆然と眺めるバーサーカー。

なんだかんだで和気あいあいなアインツベルン組だった。

掃除を終え、食堂にてティータイムとしゃれこむ中イリヤは口を開いた。

「そういえばバーサーカー。さっきは外で何をしていたの？
また、どうでもいいこと？　それとも禄でもないこと？」

「おいおい、どうしてその二択しかないんだよ。もっと、自分のサーヴァントを
信頼しようぜ。俺はただ森を、こう、そう！　改造してきただけだ！」

胸を張って己の所業を告げるサーヴァント。

「改造、ねぇ。ちなみにどんな感じに？」

「聞いて驚け、何と森の木々を動けるようにしたのだ！
侵入者なんて怖くない！　木が動くから道はアテにならない！
どうだ、すごいだろう？」

イリヤはなんとなしに外の森に視線を向けると、そこでは根っこを足の様に動かしながら、
蠢く木々がいた。

「普通に気持ち悪いんだけど！？」

「ＨＡＨＡＨＡＨＡ！　安心しろよ。他にも色々仕掛けてあるから！」

「何処にも安心出来る要素がねぇ！」

ガッデム、とばかりに机を叩き、イリヤは叫ぶ。

そんな主人に同情の目を向けながらセラが、

「ところで、どうやって買い物にいけば良いのですか？森が動くとなれば、私たちも迷ってしまいますが」

その疑問にバーサーカーはポケットからある物を取り出し、答えた。

「大丈夫だ！　この通行証があれば木々は出口まで真っ直ぐ道を作ってくれる！」

「本当に何でもアリですね」

「そんなに褒めんなよ」

「褒めてません！」

「ふふ、セラもバーサーカーも楽しそうね。でも、マスターを忘れないでほしいかなぁ」

「大丈夫、私がいる」

動いてみせろ！　第四話（後書き）

こんなイリヤ組でホントすいません。さて、次回はそろそろ兄貴に登場してもらおうかと思います。まぁ、戦闘するかどうかは置いといて。

動け！　動けよ！　第五話（前書き）

はい、今回は兄貴が登場します。それではお楽しみください。

動け！　動けよ！　第五話

セラが殺意の波〇に目覚め、アインツベルン組のヒエラルキーが変わってから幾日か経った頃。

空には雲一つなく、太陽の光が燦燦と降り注ぐ。

森達は各々太陽の光を求めウゾウゾと動きまわる。

「……キモイ」

「何か言ったか？　親愛なるマスター」

イリヤの呟きに反応したバーサーカーが尋ねる。

「うん。森が動きまわる光景っていつか慣れるかなぁ、と思ってたんだけどこれは無理」

「まぁ、いいじゃないか。こいつらのお陰で人は寄り付かない。侵入者もない。
素晴らしい事ずくめじゃあないか、親愛なるマスター」

「そう、なのかな。……ところで親愛なるってずっと付けてるけどコレっポチも
敬意が篭っているようには聞こえないんだけど？」

「いやいや、敬意は払ってるぞ。じゃないとセラがまた覚醒するからな」

どうやらセラはバーサーカーにトラウマを植え込んだようだった。
彼女がいれば、バーサーカーも少しは大人しくなるだろう。
だが、それでいいのだろうか？
それではこのサーヴァントはマスターであるイリヤではなく、イリヤの従者であるセラの言う事を聞いてるのでは？
そこまで考えて、思いついた。
イリヤはセラに命令できて、セラはバーサーカーに命令？　できる。
つまりヒエラルキーのトップ？
そんな益体の無い事を考えながら、彼女はティータイムを楽しむ。
「……お茶が切れたわ。バーサーカー、新しいの頂戴」
「俺はサーヴァントであって執事じゃないんだが」
「いいじゃない。その代わりに私は畑を造る事を許可してるんだから」
「くっ、畑を盾にするとは。なんと非道なんだ。この親愛なるマスターめ！」
愚痴をこぼしながらもお茶を注ぐ辺り、なんだかんだで仲は悪くはないのだろう。

お茶を注ぎ終え、再びまったりとしていると、バーサーカーが突如立ち上がった。

「どうしたの？　バーサーカー」

「侵入者だ。木々が告げてくる」

侵入者。

その単語にイリヤの顔に笑みが浮かび、

「そう、時期的に考えてサーヴァントでしょうね。偵察、といった所かしら。

バーサーカー、適当にあしらいなさい」

「わかった」

バーサーカーは頷き、森に向かって歩き始めた。

その背中を見ながら、

「あ、お茶菓子もきれた」

あぁ、くそったれ。

元々、気乗りのする任務じゃなかった。

だが、命令には逆らえない。

もう一度言わせてもらう。

「くそったれ。こんな面倒な事になるなんてよ」

森を疾走しながら男はつぶやく。

その男を一言で言うならば青。

青い髪に、青い鎧。

「それにしても何なんだよ、この森は。真っ直ぐ進んでいると思ったら、
いつの間にか入り口だしよ。人払いらしき結界はあるが、人を迷わすような結界はない。
ったく、どうなって、やが……る」

愚痴る男の言葉が途切れる。

なぜなら、見てしまったからだ。
目の前でウゾウゾと動きまわる木々を。
木々は青い男がこちらを見ているのに気づいたのか、動きを止めた。
「いや、おせぇだろ。おいおい、何で木が動いてんだよ。あれか？　ここのサーヴァントはキャスターなのか？」
「いいや、バーサーカーだ」
呟きに返答が返ってきた事に男は声のしたほうに意識を向ける。
すると、森の奥から一人の男、バーサーカーが現れた。
「バーサーカーだと？　の割には狂ってないようだが？」
「どうだろうな。それで何の用だ？　俺は親愛なるマスターの為に色々とやらなきゃならないんだが」
「そう言うなよ。命令でな。威力偵察をしなきゃならんのさ」
男はそう告げると、自らの手に紅い槍を持つ。
「槍？　ランサーか？」
「……どうだろうな？　さぁ、いくぜ！」
「仕方ねぇ、な！」

バーサーカーも己の手に武器を、クワを出現させた。
クワを見たランサーは目を見開き、
「それ、宝具か？」
「そのとおり。これこそ俺の宝具の一つアースプランナーだ」
「アースプランナー？　そんな宝具あったか？　というか、お前どこの英雄だ」
「答えるとでも？」
「……はっ、その通りだ。仕切りなおしだ、行くぜバーサーカー！」
ランサーが再び槍を構え、攻撃を仕掛けようとした時、
グギュルルルルル～～。
盛大に腹の音が響いた。
バーサーカーは辺りを見回すが、ここには自分と目の前のランサーと思われる男しかいない。
「今のお前か？」
「……」
「英霊って腹減るっけ？」

「いや、魔力の供給がされれば問題はないんだが。あの野郎は満足に魔力をくれねぇからな。
だから飯を食えばいいんだが……、いいんだがっ！」

ランサーはプルプルと震え、地面に数滴の雫が落ちた。

「信じられるか！？　朝にカレーを食べるのは体に良いならば麻婆も同じだとかいう良く分からん暴論で朝は麻婆サンド！　昼はこの辛さが堪らんとか言って麻婆丼！　夜は一日の締めくくりこそ麻婆とか言って、満漢全席ならぬ麻婆全席！　朝昼晩、全てが麻婆、麻婆、麻婆！こんなのがマスター変わってからずっとだ！
あぁ、もちろん反論したさ！　そしたらあの野郎、こんな事言いやがったんだ！
『貴様、カレーは認めて麻婆は認めんだと！？　貴様はカレーの子か！？　違うだろう？　お前は麻婆の子だ！』
どっちでもねぇよ！　俺はカレーシスターに付いたわけでもねぇし、麻婆神父に賛成もしねぇよ！
麻婆はもう見たくねぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

ランサー、男の魂からの大泣きだった。

不憫に思ったのか、バーサーカーも目尻に溜まった涙を拭き、ランサーに手を差し出す。

「苦労してんだな。決めた、戦う前にまずは俺と飯を食おうぜ。いくらでも食わせてやるよ」

「……いいのか？」

「流石に、いまの叫びを聞いてまで戦う気にはならん」
「バーサーカー、お前っ！　イイヤツだな」
ランサーとバーサーカーは熱く握手を交わし、ハグを交わす。

「それで、なんでこうなってるのかしら？」
「だから、言った通り戦う前に飯を食おうって事で」
「そういう事で、一つよろしく！」
食卓にはランサーとバーサーカー、そしてイリヤが座っていた。
そして彼らの前には光り輝く肉が、どこぞの塔よろしく高く積まれていた。
「まぁ、いいじゃねぇの。まずは食べようぜ」
「そうそう、というかこの肉何で輝いてんだ？」
「ふぅ。もういいわ、私気にしない。それとランサー、バーサーカーの出す物については
疑問を持ったら敗けよ」

「褒めんなよ。ちなみにコレはジュエルミートってんだ。さぁ、食べてくれ」

「「いただきます」」

そこからは会話はほとんど無く、黙々と食事が進んでいった。

食べながらランサーが涙を零して、

『うめぇ、うめぇよ。これだよ、俺がたべたかったのは』

と呟いているのを見て、イリヤも同情していた。

「あぁ、美味かった」

「それはなによりだ。ランサー」

「あぁ、ありがとうなバーサーカー。これでしばらくは戦える」

「そうか。それで、戦うか？」

バーサーカーの問いに苦笑しながら、

「やめとくわ。お前なんか底知れねぇから。あの野郎にはまぁ適当

に伝えておく。
その代わり、また食べに来てもいいか？」
「……いいんじゃないか？」
「おぉ、お前が救世主に見える」
そのまま祈りを捧げそうになるランサーを止め、彼を森の入り口まで送る事となった。
「じゃあな。それと、これは一応戦争だからな。いつかお前と真正面から本気で闘りたいものだ」
最後に英雄に相応しい笑顔を浮かべ、ランサーは消えていった。

動け！　動けよ！　第五話（後書き）

ぶっちゃけ兄貴の魂からの叫びが書きたかっただけです。やって後悔はしていませんが反省はしています。

ネタが切れてきたなぁ。第六話（前書き）

まず最初に今回の地震で亡くなった方々のご冥福をお祈りします。にじファン利用者の方々にも亡くなった方や怪我をされた方がおられるかもしれません。こんな事しか言えませんが頑張っていきましょう。怪我なく無事であった私は恵まれすぎた状況ですが、せめてこの小説が一時の慰めになればと思います。

ネタが切れてきたなぁ。第六話

白いお城の一室でイリヤは今では日課ともなったバーサーカーとのお茶会を
開いていた。お茶会にて使用される茶葉やお茶菓子は全てがバーサーカー印である。

「相変わらず美味しいわ。なんでこんな捻くれ者からこんなに美味しい物が
出来るのか不思議でしょうがないわ」
「軽く酷いな、マスター。俺の造る全てには愛が篭っている。美味いのは当然だ」

しばらくの間、お互いに軽口を叩きながら談笑を続けていると、
イリヤはカップを
ソーサーに置き、

「ねぇ、バーサーカー。そろそろ本格的に始めない？」
そう告げた。

「ん、始めるのか？」
「えぇ、始めましょう。戦争を。全てを叶える為の戦争を」

クスクスと笑いながらそう告げる少女は何処か異常にも思える。
もし、彼女の隣にいるのが常人であったのならば注意などをするのかもしれない。
しかし、幸か不幸か今、彼女の隣にいるのは少女など比にならない程の異常な存在。

故に、彼が少女を注意することはない。

「マスターの叶えたい願いってなんなんだ？」
「私？　聞きたい？　バーサーカーは聞きたい？」
「あ、やっぱいいわ。なんか七面倒な気がするから」
「私の目的はね。なんて言えば良いのかしら、復讐？　これも何処か違う気がするけれど
これが一番近いのかしらね……」
「うわぉ。俺の言葉が通じてやがらねぇよ。このマスター」
「冬木市にはね。キリツグの息子がいるそうなのよ。あ、キリツグというのはね……」

イリヤは熱が入ってきたのか、キリツグという男がどういった人物で、
自分とはどういう関係なのかを話しているが、バーサーカーは適当に頷くだけであり、
聞いているのか定かではない。

「もう！　聞いてるの、バーサーカー！」
「ん、あぁ。聞いてたさ。キリツグはマスターの父親で、だけど帰って来なかったんだろう。
で、調べてみたら此処に隠居の様にいていつの間にか養子まで取っていたと」
「あ、聞いてたんだ」
「あぁ、聞いてたとも。俺が親愛で友愛なるマスターの言葉を聞かない筈がないだろう？
サーヴァントなんだから」
「……うわーい。少しも誠意が篭ってないわね。それに貴方、単独行動のスキルが
馬鹿みたいに高いくせに何を言ってるのかしら」

「ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ！」
イリヤの言葉に只々爆笑するバーサーカー。
彼は少女に説教も注意もしないがからかう事だけはするようである。
「失礼します。お嬢様」
部屋の扉がノックされ一人の女性が入ってきた。
「あ、セラ。どう、何か分かった？」
イリヤの質問に対し、彼女は肯定するかのように小さく頷き、口を開いた。
「調査の結果ですが衛宮士郎なる人物は確かに冬木市にいます」
「そう。それで？」
「驚くべき事に彼はこの度の聖杯戦争のマスターとなったようです」
セラからの報告にイリヤは目を見開き、そして哂った。
「聞いた？　バーサーカー。マスターですって！　これはもう運命を感じるわ！
別に人となりだけ見ればいいと思っていたけれど、真逆マスターだなんて！
セラ！　お兄ちゃんが何処に向かうか分かる？」
「おそらく、ですが。教会に向かったのではないかと」
「教会……。バーサーカー！」
「行くのか？」
「えぇ。お兄ちゃんに挨拶に行こう」

「えらく痛そうな挨拶になりそうだ。なんかお土産って持っていた方がいいのか？」
「うーん。ドッキリと悲鳴をプレゼントしてあげましょう」
「りょーかい」

言峰教会から三つの影が出てくる。
出てきたのは人の良さそうな顔をした赤毛の青年と雨合羽を身に纏っており
性別が分からない人物。そして最後には赤いコートを羽織った少女だった。

彼らは何かを話しながら歩き、坂の前まで来たところで彼女等は現れた。

「こんばんは。お兄ちゃん」

それは白い、人形のような儚さと美しさを併せ持った少女と
その横に立つボロボロのローブを纏った長身の何か。

「君は……」

「御機嫌よう皆様。私の名前はイリヤスフィール・フォン・アインツベルンって言えば
分かるかしら？」

イリヤの自己紹介にいち早く反応したのは青年の横に立つ赤い少女だった。

「アインツベルン……」

「と、遠坂、それって」

「あら、遠坂の者もいたのね。丁度良いと言って良いのかしら？どう思う？」

「ふぉうでもふぃふぃんじゃふぁいふぁ？」

「って、何を一人でモソモソ食べてるのよ！　折角の登場なのよ！もっとこうラスボスっぽい感じを出してよ！」

イリヤが今までの冷たい空気は何処へやら、隣でモソモソとジャーキーを齧るバーサーカーにツッコミを入れる。

「それにズルイわ！　私にもなにか頂戴！」

「仕方ないなぁ、イリヤ君は。パカパカン！」

「その音は危ういわ！」

バーサーカーは効果音を口ずさみながらその手にお菓子を出現させる。

何も無い所から出現させたことで赤い少女が何やら驚いていたが、

「わぁ。美味しそう！」

イリヤはそれを無視し、黙々とお菓子をほうばる。

しばらく静かな空気が流れ、
「待たせたわね！　さぁ始めましょう！」
イリヤがお菓子を食べ終わったことで空気が再び緊迫に包まれかけた。
「マスター、口の端にカスがついてるぞ」
「え、嘘」
「ほれ、此処」
「あ、ホントだ」
再びノホホンとした空気に成りかけたところで、
「それでアインツベルンの魔術師？　始めても良いのかしら？」
赤い少女からの言葉が入る。
「……別にいつでもいいのに。というか何で私がお菓子を食べてる時に
襲ってこなかったの？」
「あんな空気で手を出せるならこの素人に親切心なんて働かないわよ」
「ふーん。遠坂の魔術師はお人好しなんだね」
「そうかもしれないわね。さて、始めましょうか衛宮君」
遠坂は隣に立つ赤毛の少年、衛宮にそう告げる。
「待ってくれ、遠坂。イリヤって言ったか」
「なにかしら？　お兄ちゃん」

「なんで君は戦うんだ？」
衛宮の質問にイリヤは一瞬呆け、笑い出す。
「そんなの叶えたい願い事があるからに決まってるじゃない」
「人が死ぬんだぞ！？」
「……だから？」
そう言ったイリヤの顔には何の感情も浮かんでいない。
その答えに何かを言おうとする彼の前に雨合羽を羽織った人物が出て、
「シロウ！　これ以上の問答は無用です！」
「セイバー！？」
雨合羽を脱ぎ捨て、イリヤに向かっていく。
落ちた雨合羽の下から現れたのは白銀の鎧、輝く黄金の髪に確固たる意志を携えた顔。
手には何かを持っているのだろうが見ることは出来ない。
セイバーは一呼吸の間にイリヤに接近し手に持つ何かをイリヤに振り下ろそうとする。
「……バーサーカー！」
「おぅよ！」
振り下ろされた何かはイリヤとセイバーの間に割って入ったバーサーカーによって

防がれ、それに伴い両者の間で金属と金属がぶつかる音が辺りに響き渡る。

衝撃によってボロのローブが吹き飛び、バーサーカーの全容が露になる。

バーサーカーはセイバーの振るう何かを長手袋を着けた左腕で防いでいた。

「篭手か何かでも付けているのか？」

「セイバーだったか。俺が答えるとでも？　そして貴様が振るっているのは

不可視の剣といった所か。俺の長手袋が切れちまったぞ。どうしてくれる」

「そんな事は私の知った事ではない！　貴様も己が獲物を出せ！」

「親愛なるマスター、どうする？」

バーサーカーは自身のマスターに確認を取る。

イリヤはクスリと笑い、

「今回は顔見せ。無駄に手の内を晒す必要はないわ」

「りょーか……」

答えようとしたバーサーカーの頭に一本の矢が突き刺さり、

バーサーカーの体が地面に倒れる。

「よしっ！　油断は良くないわよ？　アインツベルン」

遠坂はガッツポーズを取りながらそう言った。

「遠坂、やったのか？」
「えぇ。衛宮君も見たでしょう。頭に矢が刺さったのよ。これで倒せなかったら……」
「もぅ。何をやってるのバーサーカー。さっさと起きなさい」

イリヤが頬を膨らませながらそう言うと、地面に臥しているバーサーカーが
何事も無かったかのように立ち上がり頭に刺さった矢を抜く。

「痛かった……。こんなに痛いのはアーちゃんと戦った時以来だ」

「遠坂、さっきの続きは？」
「倒せなかったら、化物って事よ。アインツベルンは一体何を召喚したのよ」

遠坂は下唇を噛む。

バーサーカーの視線が彼らの方を向く。

セイバーは咄嗟に自身のマスターである衛宮の前に立ち、遠坂の横にもいつの間にか
現れた紅い外套の男が立つ。

バーサーカーはそんな彼らを気にすることなく、手元に光り輝くナニカを取り出す。

「何！？　宝具？　いや、この香りは……っ！」

それは夜を照らす月よりも強く、しかし優しく輝く一枚の肉。

「シロウ！　あの肉はなんですか！？」
「俺にも分からない！　だがなんなんだ！　この本能を打ち抜く強い肉の匂いは！」
「それだけではない。どの高級フレグランスにも負けない高貴な香り。
あれは一体……っ！」
「アーチャー？　何を言ってるの？」
「リン！　君には分からないのか！？　あの肉の香りと存在感が！
あれは宝具にも
匹敵しうる！」
「え？　え？　アーチャー、大丈夫？」

遠坂がそう言うと、周りの目がお前こそ何で分からない、とばかりに突き刺さる。

「え。なにこの空気。私が悪いの？　ねぇ！」

紅い少女は叫ぶが、誰も答えを返す事なくその視線は肉に注がれる。

その肉をバーサーカーは気にすることなく自身の口に運び、食べる。

「あぁ！　バーサーカーずるい！　後で私にも頂戴！」
「安心しろ。親愛なるマスター。これは今日の夕食だ」
「ホント？　やった！　じゃあ早く帰ろ！」

イリヤはそう言いバーサーカーの手を引く。
その姿は歳相応の少女のソレだった。

「待ちなさい！　バーサーカー！」
「なんだ、セイバー」
「私たちを捨て置くのですか！？」
「……そうだけど？」
「見逃すと思いますか？」
「この肉をやる、と言ってもか？」

バーサーカーはそう言うと、再び己の手に肉を取り出す。
セイバーはゴクリと喉を鳴らすが、

「騎士を食物で釣れると思わないで下さい！」
「あ、いらない？　じゃあ捨てるわ」

バーサーカーは肉を空高く、セイバー達の方向に放る。

「あ！」

イリヤとバーサーカーを除く全員が声を上げ、肉の方を見る。

「セイバー！」
「任せてください！　シロウ！」

衛宮が叫ぶと同時にセイバーは肉に向かい、高く飛ぶ。

ぶっちゃけサーヴァントの性能の無駄遣いである。

しかして肉はセイバーの腕に納まる。

「よくやった！　セイバー！」

「当然です。この身は最優と名高きセイバーです」
「ところで、アインツベルンは？」
遠坂の言葉に全員の視線が坂の上を向く。
当然の事ながらそこには誰もいない。
「あ」
「まぁいいではないですか、リン。こうして肉は手に入ったのです」
「どこがよ！　こっちの情報だけ漏れて向こうの事は何も分からなかったじゃない！」
「ではリンは肉を見捨てろと！？」
「そうだぞ、遠坂！　こんな良い肉は見たことがない！」
「リン、諦めろ。それよりもその肉は当然、山分けだよな？」
「む、アーチャー。貴方も欲しいのですか？」
「ふ。興味があるだけだよ」
「じゃあ別にいいですね」
「待て、済まない。分けてくれ」
「アーチャー！？」
「リン、分かってくれ。あの肉を逃すは一生の後悔だ」
「……取り敢えず衛宮君の家に行きましょう」
後ほど食べた肉はとても美味しく、セイバーが度々バーサーカー

の姿を捜すように
なったのはどうでもいい話。

今日は何の日〜。フフッフ〜（前書き）

という訳で今日は何の日でしょうか！？

注、今回の話は本編とはまったく関係がありません。

今日は何の日〜。フフッフ〜

決して雪が解ける事の無い森の奥にひっそりと、しかし確かに存在する白い城、
アインツベルン城に一つの叫びが木霊する。
「バーサーカー！　シロウを解放するのです！」
叫び、不可視の剣を構える黄金の髪を持つセイバー。
それを見下ろしながら口元に狂った様な笑みを浮かべているバーサーカー。
彼等が対峙しているのはアインツベルン城の大広間であり、バーサーカーの横には
一つの十字架が悠然と立っている。
十字架にはセイバーのマスターである衛宮士郎が磔となっていた。
「くくく、羽虫が騒ぎよるわ。解放して欲しくば己の力で取り戻せばいいだろう？
サーヴァントの中でも最優と名高きセイバーにはそれが出来ない、と？」
「見え透いた挑発だな、バーサーカー。あからさまに虎口と分かる場所に考えもなく
足を踏み入れて何になるというのです。それよりも貴方には聞きたい事があります。
何故、シロウを」
セイバーの疑問の意味が分からないのかバーサーカーは首を捻り、
「敵方のマスターを捕獲する事に意味が必要か？　これは戦争なんだぜ」
「例え戦争であっても忘れてはならない事がある！」
「ほう。それは……？」
「誇りだ！　今の貴様にはそれがあるようには思えない！　答えろ、バーサーカー！

この行動は貴様のマスターの指示なのか！」
「マスター？」
「そうだ！　貴様のマスターは何処にいる！」
セイバーが問い詰めるとバーサーカーは突然笑いだした。
「マスター、マスターね。そんなのもいたなあ……」
その哂いは歴戦の戦士であるセイバーの背筋に冷や汗を流させるには十分過ぎた。
「貴様、何を、何を言っている」
「ああ、ああ。俺の親愛なるマスターなら俺の横にいるじゃないか。まあ今は眠っているがな」
自身の上に置いてある玉座の様な装飾を施された椅子を指差し、再び哂う。
椅子の上には白い少女が眠っているように座っていた。
その胸元に赤い、朱い染みをつくりながら。
「貴様、自分のマスターを！？　なのに何故現界出来ているのだ！」
セイバーの疑問は当然の物である。
サーヴァントとはありとあらゆる時代の英雄の魂。
彼等の魂をこの世に引き止めるにはマスターの存在とその魔力が必要不可欠なのだ。
しかし、マスターが死んだ筈のバーサーカーは此処にいる。
「なあに、親切な、それはもう優しい優しい金ピカとその主が俺にある物をくれたのだ。
それを飲んだら俺はこの通り受肉した。そうなればマスターなどいらない。だから、
殺した。それだけだ」
その行為に何も感じ無いのかバーサーカーの表情に変化は見えない。
「受肉だと！？　あり得ない！」
「あり得ない？　だが俺は此処にいる。そして受肉した祝いに聖杯を頂こうと思ってな。

最初の標的が貴様等だったというだけだ。簡単だったぞ、お前のマスターを拐うのは。
なにせ、幼子が助けを求めている、と伝えただけで血相を変えて自ら虎口に入ってくれたのだからな」
「シロウを騙したのですか！？」
「戦争に権謀術策は付き物だろう？」
くくく、哂うバーサーカーにセイバーの怒りが爆発する。
「バアアサアアカアアアア！」
「そうだ！　掛かってこい！　セイバアアアアア！」
そして両者がぶつかる直前に、床に巨大な魔方陣が描かれ、中から山羊の頭に龍の体を持った何者かが現れる。
「くくく、自ら死にに来るとは。ばかだな、貴様」
「何者だ！」
「魔界七大魔王が一人、アスモデウス。そして……」
アスモデウスは後ろに隠していた何かを取り出す。
何かが来る、と思い身構えるが出てきたのは一枚の看板。
そこには、
『騙してゴメンね。今日はエイプリルフール』
と可愛らしく書かれていた。
「……は？」
セイバーが呆けていると、
「バーサーカー、成功したね！」
死んでいた筈のイリヤが椅子から立ち上がり、ニシシと悪戯っ子の笑顔を浮かべる。
「え？　え？」
次に十字架に磔にされていた士郎が自分で拘束具を外し、
「いやあ、ここまで上手くいくなんてな。バーサーカー、お前の演技凄かったぞ。

それと約束の品、ちゃんと頼むぜ」
「任せろ、至高の一品をくれてやる」
「え？　え？　え？　シロウ？　一体何がどうなってるんですか？」
「何って、エイプリルフール？　いやあ、演技に協力したらこの前の肉を１０ｋｇもくれるって言うからさ。それに楽しそうだな、って思って」
士郎は朗らかに笑いながら言う。
「つまり、ここにいる全員で私を謀った、と？」
「御免！　でも許してくれ！　報酬が魅力的だったんだ。後、エイプリルフールだし。
それにあの時の肉もたっぷり貰えたからさ」
セイバーの体がプルプルと震える。
士郎はセイバーも喜んでくれた、と自分を納得させ頷いている。
「ふ、ふ、ふふふふふふふふ」
「セ、セイバー？」
セイバーの目が据わっていた。
「全員、そこに並びなさい……」
「え、え？」
セイバーのただならぬよ様子にようやく気づいた士郎は後ろを振り向き、
企画発起人に助けを求めようとするが、そこには
『後はガンバ！　肉は後日届けておく。生きてね、お兄ちゃん』
という文字と可愛くデフォルメされたイリヤの顔が書かれていた。
「嘘、だろ？」
「さあ、覚悟はいいですか？　シロウ」
「ま、待ってくれ！　セイバー！　肉を手に入れる為だったんだ！
お前の為でも
あったんだ！」
「問答無用！　約束された勝利の剣（エクスカリバー）！」
「なんでさーーーーー！？」

その日アインツベルン城から金色の光が溢れ、一人の青年が星となった。

何処か、遠くの場所で。
「いや、楽しかったなアーちゃん」
「まったくだムーちゃん」
「お兄ちゃんはそろそろ星になってる頃かな……」
「かもなあ。取り敢えず」
三人は各々コップを掲げ、
「お疲れ様でした！」
乾杯した。

今日は何の日〜。フフッフ〜（後書き）

士郎は星になったのさ。オチの為にな。

というわけで本日はエイプリルフールなのでエイプリルフールネタをお送りしました。楽しんでいただけたでしょうか？

それではまた次回。

久々にネタが降ってきた！　第七話（前書き）

お久しぶりです。遅くなりましたがようやくネタが降ってきたので投稿いたします。それではどうぞ

久々にネタが降ってきた！　第七話

ムラサメが召喚されてからというものアインツベルン城には笑い声、怒鳴り声、様々な
声が木霊する。そして今日もまた……。

ドタドタドタと大きく足音を響かせながら廊下を走る影があった。
それはこの城の城主であり、聖杯戦争における優勝候補の一人であるイリヤだった。

彼女は一つの部屋の前にまで行くと、その扉を思い切り蹴破る。

「聞いてよ、ムラえもん！　どこぞの教会の陰険ドS神父が私の事を馬鹿にするんだ！
見返したいから何か出して頂戴！」

ムラえもんと呼ばれた男、ぶっちゃけムラサメは面倒くさそうにゆっくりと彼女の方を
振り向く。この時に尻を掻きながら振り返る辺りに多少の悪意を感じる。

「イリ太くん。そうやってすぐに英霊に頼るのは君の悪い癖だよ。
でも、
あの陰険どS麻婆こそ我が命神父が相手なら仕方がない。パカパカン！　服従の種～。
これは飲ませた相手を君の思い通りの人形にするというとーっても
便利な種なんだ。
これを麻婆にでも入れて差し入れすればアラ不思議。あの神父は君の人形さ！」

「却下！　怖すぎて使えないわよ！　そんな道具！」

「イリ太君はワガママだなあ。……というか飽きたからやめていいか？」

「うん。私も飽きてきたからいいよ。でも、言峰に一泡吹かせたいのは事実よ。
ムラサメ、実際の所なにか無い？」

そう言って手を差し出すイリ太改めイリヤ。
ムラサメは暫く何かを考え込みながら、やがて手をポンと打ち、何かを取り出す。

「ペコペコン！　あべこべの種～」

「やめたんじゃなかったの？」

「いや、何となく」

「ふーん。で、その種はなんなの？」

「この種は入れた物の味を真逆にするんだ。つまり、甘い物を辛く、辛い物を甘く。
ランサーの言うとおりあの神父が麻婆教ならきっと激辛だ。それにこの種を入れれば、
くく、どうなるかな？」

意地の悪い笑みを浮かべながら種を手の中で転がす。

種の説明を受けたイリヤの目にも悪戯っ子の様な光が灯る。
「ナイスだわ。そんなのを待ってたのよ。……でも問題はどうやって入れるかよね。
はっきり言って言峰は異常だわ。生身の強さでなら相当な物。私みたいな生粋の魔術師
じゃ何かする前にやられるわね」

どうしたものかしら、と顎に手をやり考えていると、部屋の窓がギィと開いた。
「ようよう、何だか面白そうな事を考えてんじゃねか。俺にも一枚噛ませろよ」

窓の枠に足を置き、イリヤ達の前にいたのはランサーだった。
「あら、ランサー。今日もご飯でも食べに来たのかしら？」
「そんな所だ。今日は麻婆豆腐地獄巡りこの辛さ、正にマグマ級！
だったんでな。
嫌気が差してきた。……あのいけ好かねえ金ピカは早々に外に食いに行きやがったしよ」

ブツブツと文句を垂れているが、結局の所彼はまた麻婆豆腐から逃げてきたようだ。
「……それでだ。バーサーカー、その種を麻婆豆腐に入れれば味が真逆になるんだな？
言峰の野郎に一泡吹かせられるんだな？」

「一泡吹くかは保証できんが、味は確実に真逆になる。……そうだな。
親愛なるマスター、こんな所に俺特製のケーキがあるんだが食べるか？」

「気が効くわね。わあ、モンブランだ！　いっただっきまーす！」

イリヤはムラサメがどこからともなく取り出したケーキを嬉しそうにほうばる。
彼女がケーキを食べた瞬間にムラサメの瞳が光り、手に持っていた種をイリヤの口に放り込む。すると、甘くて美味しい！　と言っていたイリヤの顔が青くなり、

「かっらーーーーい！　何すんのよ、バーサーカー！」

「なにって、実証？」

「マスターを使う事ないでしょ！？　そういう役回りはお兄ちゃんかソコのランサーにやらせればいいじゃない！」

「サラリとひでえな、嬢ちゃん。だが、効果は確かなようだな」

「当たり前だ。コレを作ったのは俺だぞ？　それで、どうする？」

ハッと鼻で笑い、バーサーカーの手から種を取る。

「任せとけよ。俺は全サーヴァントの中でも最速のランサーだぜ？」

「……カッコイイ筈なのにどうも締まらないわね」

バーサーカーから種を受け取ったランサーは街を駆けながらこれから起きるであろう事に思いを馳せ笑い声を漏らす。

いつもいつも麻婆豆腐しか出さないあの言峰に一泡吹かせられるかもしれないのだ。

笑いが漏れるのも仕方がない。

「くくく、待ってろよ。言峰ぇ」

「随分と楽しそうだな、雑種」

疾走する彼の前を塞ぐ者がいた。

それは金色だった。

全身を金色の鎧で包んだ金髪紅眼の青年。

全身から溢れ出るオーラ。

おおよそ常人とは言えない存在だった。

そして、何よりも特徴的なのはその目だった。

世界の全ては須らく自身の物、と言ってはばからない傲岸さがあった。

「お前かよ。別になんだっていいだろ。俺が笑ってちゃいけねえのかよ。
ええ？　ギルガメッシュよお」

「ふん。貴様如きが何をしていようと我には関係が無い。だが、貴様が手に持つソレに関しては別だ。問うぞ、ソレは何だ？」

ギルガメッシュ、そう呼ばれた男はランサーの事を歯牙にもかけていないのか自身の言葉のみを伝える。

そんな彼の様子に内心で舌打ちをするが別段隠す事でもないか、と思い話す事とした。
ランサーの説明を聞いたギルガメッシュは笑う。

「なんだ、その巫山戯た代物は。我は知らんぞ、その様な物。答えろ、ソレはどこで手に入れた？」

「……バーサーカーだよ」

「バーサーカー？　バーサーカーだと？　……そういえば今次のバーサーカーは何かが違う、と奴が言っていたな。ふむ、まあいい。奴に関しては今度我が赴けばいい。
それよりもだ、その種、我に寄越せ。我が使ってやろう」

「なっ！？　巫山戯んな！　俺はコレを使って一泡吹かせるんだよ！」

「貴様如きが出し抜ける相手か。勘違いするな、その役目代わろう、と言っている。
我とてもう麻婆豆腐は嫌なのだ」

その言葉を聞いた瞬間、ランサーは思考する。

目の前の奴は確かにいけ好かないが、実力は確か。
ならば、コイツに任せるべきか？
それに此処でこの俺様に反対しても旨みはない。

「……ちっ。しょうがねえ。ほらよ」

種をギルガメッシュに向け投げ渡す。

ギルガメッシュはソレを受け取り、楽しそうに笑う。

「くく、良い判断だ。ここで貴様が渡さなければ我は力尽くで奪っていた。
さて、戻るとするか。この時間ならば奴は麻婆豆腐を作っている筈だ」

「あいよ」

ギルガメッシュの言葉にランサーは頷き、二人で教会へと赴く。
この時、彼等の脳裏にあったのはただ一つ。

もう麻婆豆腐は嫌だッ！！

その日の夜、言峰教会に一人の神父の絶叫が木霊した。
そして、その日、教会の一室にてミノムシ状態に吊るされ、激辛麻婆豆腐を延々と
食べさせられるランサーとギルガメッシュの姿があった。

久々にネタが降ってきた！　第七話（後書き）

ははは、すいません。取り敢えず謝ります。王様が何だか違う人物になってしまいました。こんなネタで大丈夫か？

それではまた次回。今度はなるべく早くネタが降ってきますように。

ポチや、ネタは何処にあるんだい？（前書き）

久々に更新します。どんどんカオスってくよ！

ポチや、ネタは何処にあるんだい？

アインツベルン城。それは魔術師達からは一種の畏怖をもたれるアインツベルン一族の
極東における拠点の一つであり、その美しい外見からは予想もつかないほどに様々な魔術
結界や、妨害魔術が仕掛けられており、一種の要塞と化している。

それ故にこの城は手出しをされることは滅多にない。
そして、外敵が攻めてこないということは城は静寂に包まれている筈なのだが……。

この第五次聖杯戦争においてこの城が静かである事は滅多にない。

アインツベルンの森に音程の外れた歌声が響く。
歌っているのはバーサーカーのクラスとして召喚されたムラサメ。
そして、その彼の傍らでは彼のマスターであるイリヤが歌を聞いている。

「ある～日、森の中、ムラサメに出会った♪」

「絶望ね！」

「辛辣なツッコミありがとうマスター。だが、いきなり絶望とは酷くはないか？」

「じゃあ、もし出会ったらどうするのよ」

「そりゃあ新作の寄生植物の実験台に……」

「はい、アウト！！」

ムラサメに再びツッコミを入れるイリヤ。

傍目から見ると手のかかる兄とそれを諌める妹のようにも見える。

これだけでこの主従の仲の良さが見て取れるというものである。

「さて今日の畑仕事は終わり、だな」

先ほどまで振るっていたクワを肩に担ぎ、軽く汗を拭う。

「バーサーカー、今日のお菓子はなに？」

「仕事が終わるやいなや菓子要求か」

「だって、美味しいんだもん」

「はいはい。今日のお菓子は俺特製ミルフィーユですよっと」

「ミルフィーユ！？　早く城に帰ろう！」

そう言ってムラサメの裾を引っ張るイリヤは歳相応の少女の様に見える。

しかし、その表情が一瞬にして魔術師のそれへと切り替わる。

「バーサーカー」

「……敵か？」

「うん。数は一人。この感じ英霊？　でも、ナニカが違う。なんなのこれ？」

イリヤは眉間に皺を寄せながら結界に侵入してきた者の詳細を探る。

「まずは城に戻ろう。城にある遠見の魔術を使えば詳細が分かるはず」

城に戻ろうとするイリヤの腕をムラサメは掴み、自身の背後に隠す。

「マスター、もう遅いようだぞ？」

「え？」

イリヤはバーサーカーの言葉に止まり、そして見た。
結界の役目を果たしている筈の森が一瞬にして消し飛ぶのを。
そして、何もなくなった森の入り口から悠々と歩いてくる金色を。

「王の前だぞ。頭が高い」

金色、ギルガメッシュの口から発せられたその一言には通常の人間ならば抗えぬ程の
威圧と威厳がこもっていた。

しかし、この場にいるのは通常とは言えない者ばかり。

「あら、侵入者の方は随分と傲岸不遜なのね」
イリヤのその言葉にギルガメッシュは薄く笑う。
「はっ。傲岸でなければ何が王か。まあよい、この我自らが来てやったのだ。
それなりにもてなしてもらおうか」
ギルガメッシュの言葉が合図となり、お互いに構える。
先手を取ったのはギルガメッシュだった。
彼の背後から１０を超える剣や槍がその姿を晒す。
魔術師であるイリヤはそれら全てが宝具である事を即座に看過する。
それと同時に戦慄する。
（宝具を大量に保持する英霊？　そんな英霊がいるなんて……っ）
自身の抱えるサーヴァント、バーサーカーも規格外とは言え、
驚きを隠す事が出来ない。
「バーサーカー！」
「おうよ」
イリヤの言葉にムラサメもまた自身の腕を地面に叩きつけ、数多の植物を生み出し、
臨戦態勢に入る。

植物、生命を生み出した事にギルガメッシュはほんの少しだが目を見開く。

「ほう。ただの雑種かと思えば、なるほど。あの駄犬の言うことも偶には役に立つ。
ふむ、我の知らぬ力……。我の知らぬ宝具か。興味深い」

ギルガメッシュはそうつぶやくと、手を一振りし背後の宝具を消し去る。

「雑種、興が乗った。歓待の場を設けさせてやろう」

どこまでも傲岸不遜な物言いにイリヤはムッとするが、ムラサメはそれを抑え、
自身の力で樹のテーブルと椅子を創りだし、自前の酒を置く。

「ふむ。簡素だがまあ良い」

ギルガメッシュが座り、それに続きムラサメとイリヤも座る。

ギルガメッシュは用意された酒を一口あおり、問う。

「雑種、疾く答えよ。貴様の力はなんだ?」

対するムラサメもまた酒を飲みながら答える。

「答えるとでも?」

「王が質問しているのだ。答えるのは義務であろうよ」

ギルガメッシュの言葉には理不尽しかない。しかし、自身は唯一無二の王であるという
自負が彼の言葉に理不尽以外の物を感じさせる。

「……聞きたいなら、勝負でもしないか？」

「ほう？　勝負ときたか。王たる我が下の者からの勝負に応じるとでも？」

「応じざるをえないだろう？　お前の言う下の者からの勝負を逃げれば王としての
経歴に傷がつくぞ」

「言ってくれる。いいだろう。これも戯れ。して、勝負の内容は？」

ギルガメッシュに酒瓶を掲げるムラサメ。
それが意味するのは……。

「飲み比べと行こうじゃないか」

「……面白い。我に挑んだこと後悔させてくれる」

ギルガメッシュはそう言うと、背後に空間を開き数え切れない程の酒樽、酒瓶を出す。
対するムラサメも自身の宝具である『人ナラヌ者達ノ楽園』に設置してある蔵から酒を
転送させる。

そして、両者はどちらが言い始めた訳でも無く、飲み始める。

飲み比べが始まってから二時間が経とうとしていた。
勝負は未だ付いておらず、ギルガメッシュもムラサメも飲み続けている。

ここで暇なのがイリヤである。

酒を飲めない彼女からすれば今の状況は暇でしょうがない。
最初こそはムラサメが出したスイーツを食べていたが、それも品切れとなり、後は
二人の勝負を見ているだけとなった。

「雑種ぅ。貴様、中々に良い酒を持っているではないか」

「ふん、そういう貴様こそな」

グビグビグビグビと喉を鳴らしながら酒を飲んでいく二人。
既にギルガメッシュの顔は大分赤くなっていた。

それに対し、ムラサメはまだ余裕の表情である。

この差はなんなのだろう。

イリヤがそう疑問を抱いた時、彼女の脳裏にある推測が閃いた。

（バーサーカーは半樹半人。まさか、飲んだ先から速攻で吸収してるの？）

イリヤは懐疑的な視線をムラサメに向けると、彼はギルガメッシュに見えない様にウィンクをする。

（やっぱり！　これは相手が可哀想だなあ。大凡飲み比べに置いてムラサメに勝てる人物はこの世界にはいないんだから）

そして、遂に決着の時が訪れた。

ガシャンという音と共にギルガメッシュが机につっぷしたのだ。

「ふ、俺の勝ちのようだな」

「ぐ、ぐぅ。遺憾だがそのようだ。我の……敗北だ」

ギルガメッシュは心底悔しそうな表情を浮かべながらそう呟く。

「誇れ、貴様は王に勝ったのだ。……それで我に何を望む？」

「……なにも」

「貴様、我を愚弄するか！」

「別にそういう訳じゃあない。そうだな、じゃあまた飲もうぜ！」

屈託なくそう言って笑うムラサメにギルガメッシュは毒気を抜か

れたのか呆け、
そして笑った。
「ははは！　いいだろう。雑種、いや、好敵手よ。次は我、ギルガメッシュが勝つ！」
ギルガメッシュはそう言うと、やや覚束無い足取りで森から出ていく。
彼の背中を見送りながら、イリヤは呟く。
「あれ、ギルガメッシュだったんだ」
「どうしたマスター？」
「……ううん。なんでもない。私のサーヴァントは頼りになるなって思っただけ」

「ギルガメッシュ、酒臭いぞ。その様で教会に入らないでくれ」

「何！？　おい、言峰！？」

ポチや、ネタは何処にあるんだい？（後書き）

オチは英雄王。
さて、次回は誰と絡ませよう……。
それではまた次回。

大晦日だよ！　外伝さ！（前書き）

早すぎますが、大晦日です。これが本年最後の更新です。
最後の更新はこれであるべきだろう、という私の独断と偏見で決定しました。

それでは少しでも笑っていただければ幸いです。

大晦日だよ！　外伝さ！

「も～い～くつ寝～るとお～正月～」

第五次聖杯戦争においてアインツベルンの城が静かである事は有り得ない。
今日もまたアインツベルン城城主にしてマスターであるイリヤの歌声が城に響く。

彼女は城の広間で華麗にステップを踏みながら、先程から一つの歌を歌っていた。
華麗なステップと彼女の歌う歌がミスマッチなのは言うまでも無いが、それよりも
際立つのが彼女の格好だった。

それは、日本が誇る伝統衣装である振袖だった。
イリヤの纏う振袖は祝い事用である為、紅の生地を主とし、柄として彼女の髪色と同じ
銀糸を使い、蝶や花が編みこまれた物だった。

日本の振袖を着ながら、正月を待ち望む歌をステップを踏みながら歌う。
本来であるならば違和感しかわかないであろうが、そこはイリヤの放つ魅力がそれを
無くしていた。

彼女はステップを踏み続ける。

そして、ピタリとステップを止め、

「バーサーカー！　正月の準備は良い？」

そう虚空に向かって言うと、彼女の前に色々と抱えたムラサメが現れる。

「勿論だ。これを見ろ。『色んな』所から仕入れてきた正月用の道具の数々だ」

戦利品を掲げるようにムラサメは抱えている品々を見せる。

「さすがね、バーサーカー！　さ・て・と、早速飾り付けをしなくちゃね」

ステップ１　『門松』

「まず門松を作る上で必要な物はなんでしょうか？　……はい、そこの幼女マスター」

「私をあまり舐めないほうがいいわね、バーサーカー。キリツグから教わってるわ。
カドマツにはタケがいるって事ぐらいね！　さあバーサーカー！
創りだすのよ！」

「うわお、いきなりサーヴァントを使いやがったよ。まあ、そういう能力持ち
だからいいけどよ……」

ムラサメが地面に手を置き、イリヤから供給されている魔力を使

い、竹を生やす。
ピョコンと筍が生まれ、みるみる青々とした竹へと成長していった。

「はい、竹の完成っと」

「便利な能力よねえ。それで、これを切るのよね」

「その通りだ。だが、竹というのは丈夫でな。中々切れない。……そんなわけで」

ムラサメは一旦言葉を切り、叫ぶ。

「センセー！　センセー！　お願いします！」

「任せてください。バーサーカー」

ムラサメの言葉に応じたのは鎧を着こみ、不可視の聖剣を構えたセイバーだった。
不可視の聖剣からは轟々と風が吹いている事から彼女のヤル気が窺えるという物だ。

「セイバー？　なんで此処に？」

「バーサーカーのマスター、貴方の疑問は最もだ。だが、これにはちゃんとした理由があるのです。そう、バーサーカーの提供した食材をシロウが調理したおせちが報酬として確約されているのです！！」

クワっと目を見開きながら力説するセイバー。
そんな彼女の様子に多少引き気味のイリヤ。
心なしか聖剣が纏う風が悲しげな気がするのはきっと気のせいだろう。
だが、セイバーの目にはそんなイリヤの様子など写っていない。
今の彼女の目にはただ『おせち』としか書かれていないからだ。
こんなのが最優のサーヴァントだというのだから世も末である。

ステップ2　注連飾り

「はい、次は注連飾りです。これは入り口とかそういった場所に飾るんだが、住居（城）がでかいので、自然とこれも巨大化する」
「ふんふん。で、またバーサーカーが創りだすの？」
「いや、今回はある人物が協力を申し出てくれた。それではお願いします！」
「フハハハハ！　満を持して我、降臨！」
上空に金色の輝きが溢れる。
そこには黄金の船『ヴィマーナ』の舳先にいつも通りのポーズで高笑いする英雄王の姿があった。

「出た、金ピカ。え、あの生きる俺様の原典が協力？　マジで？」

「マジで」

「ふん、感謝するといい、雑種共。ほれ、此れが王の注連飾りというものだ！」

ギルガメッシュが空から巨大な注連飾りをほうり投げる。
それは、いっそ悪趣味ともいえるほどふんだんに金銀財宝を使い、飾り付けをされた
注連飾りだった。流石に注連縄の部分を構成するわらは普通の物だろうが、それでも
それは光り輝いていた。

「うわ、趣味ワル」

「はっ、雑種には王の財宝の価値は分からんようだな」

「なんですってええええ！」

喧々囂々。まさにそういう言葉が正しかった。
イリヤとギルガメッシュの背後にマングースとハブの幻影が映る。

「おーい、これ取り敢えず飾っておくぞ～」

ステップ3　おせち

「さて、ここは厨房です。まあ料理人の戦場よな。さてさて準備の方はどうだい？

主夫衛宮君」

「ああ、バーサーカーか。見てくれ、渾身の出来だ！」

士郎は晴れやかな笑顔でおせちの重箱をつきだす。

そこには色とりどりの料理が詰められている。

代表的な伊達巻に始まり、紅白かまぼこ、栗きんとん。

焼き物に海老や鯛、鰻。

そして最後に煮しめとして、くわい、蓮根、里芋などである。

「ほう、これは中々」

「だろう？　「ふん、その程度で渾身とはな」……だれだ！？」

「ふう。私の声も分からないとは……」

ヤレヤレと肩をあげながら、ため息をついて出てきたのは赤い弓兵。

「アーチャーか」

「そういうことだ、バーサーカー。さて、そこの未熟者。

その程度のおせちで渾身とはな。はっ、底が知れるな」

「じゃあ、お前ならどのくらい出来るんだよ」

士郎の棘のある言葉にアーチャーは当然だ、と言わんばかりにエプロンを纏う。

「……ヤル気か？」

「貴様が勝てるとでも？」

「やってみなければ分からないだろう？」

火花が散る。

そして、始まるクッキング戦争。

ここにもう一つの戦争が幕を上げた。

ステップ４　厄除け

「最後に厄除けだが……。まあ、正直言ってめんどいからこれを飾っとけばいいだろ」

ムラサメは適当に紅い枝を入り口に吊るす。

「さて、それでは皆さん良いお年を」

「俺の宝具（ゲイボルグ）ーーーーーーー！！！！！」

大晦日だよ！　外伝さ！（後書き）

さて、本当なら正月の直前などに投稿したかったのですが、一身の都合でこのような早い時間に投稿させていただきます。これにて本年筆納めです。

それでは皆さん、良いお年を。

俺、来年こそはコミケに行くんだ……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0408q/

樹木の王すぺしゃる！

2011年12月31日00時10分発行